別冊 センターつうしん NO.92

こども教育文化

第19号

もくじ

道徳の授業をつくる　掛川　恵一…1
わたしの出会った子ども　加藤　修二…5
ひどい先生だった
宮城の教師 2
「門真 隆」と子どもたち　…12
大槻　邦敏　芦澤　紀子
中村真知子　平間　節子　齋藤　章夫
揚妻　和子

道徳の授業をつくる

掛川　恵一

○学校現場における道徳の授業

平成30年度4月から本格的に「特別の教科・道徳」がスタートした。多忙な学校現場にあって、現場の関心は、「どのように授業を進めるのか」よりは、「どのように成績をつけるのか」になっている。そして、評価のために授業をどうするのか、とにかく授業の後の感想を書かせることを大切にしようという声があって、自分も周りの先生達もそうしていた。でも、発想としては逆転している。評価のための授業であっていいのか。しかし、そんなことを考える余裕もなく、この時期、仙台市では、何とか一学期の道徳の評価を先生達は頭を悩ませながら所見を書き上げたところだと思う。もともと道徳の授業が好きだったり、研究していたわけでもなかったのだが、この夏、たまたまある場で実践をする機会があった。その授業の報告をします。

○実践の場「黒川夏の学校」について

県内に「黒川夏の学校」というものがある。私も2年前に初めて知ったのだが、夏休み期間のお盆過ぎに小学校6年生だけを集めて、黒川郡大和町の台ヶ森温泉で二泊三日の宿泊学習を行う取り組みである。現役教員と教員OBの有志が手弁当で運営を進めており、何と今年で40回目となる歴史ある活動である。今のご時勢、食物アレルギーなど、子どもを預かり宿泊させる上ではいろいろと気を遣うことは多い。もちろんお金もかかる。そんな中で続けられている全国的にも稀有な取り組みだと思う。そして特徴的なのは、県内の実践家に声をかけて、さまざまな授業を提供してもらい、子どものみならず、夏の学校に関わる教師たちもまた、共に学習を深めるところだ。昨年私は、元宮教組委員長の高橋達郎先生の授業を見せてもらい、国語の授業づくりについて学ばせてもらった。そして、今年は恐れ多くもそのような場で私が道徳の授業をさせていただいた。子どもは、いくつかの小学校から集まってきた6年生18名であり、娘もその中にいた。そういう意味でも貴重な体験だった。

○授業をつくるきっかけ

テーマは「見た目問題」であり、正確には「容貌障害」の授業である。実は、2年前に6年生を持っていたときに、右の本（2002年　扶桑社）を元に授業をしたことがあった。この本には、9人の容貌障害の方の壮絶な半生のお話が載っているが、その中の藤井輝明さんを取り上げた。理由は、You

Tubeに藤井さんについて良くまとまった動画があったことと、この藤井さんは、容貌障害による差別や偏見をなくすために、積極的に世の中に発信している方だったことも挙げられる。著書も出されていて、小学生向けの出前授業や高校生向けの講演活動を行っていたことも子ども達にとって身近に考えられ、教材的に価値があると考えた。また、学ぶ子ども達が、自分の見た目に気を遣う思春期を迎えることも取り上げた理由として大きい。ちなみに、この授業をする前には、ホームレス問題、性同一性障害をテーマに授業もした。だた今回同じような内容で授業をするのは芸がないと考え、一から作り直すことにした。そして、今回の授業づくりでは、藤井輝明さんの以下の文章が大きなヒントになった。

「現代社会においては、怪談やホラー映画・TV番組の影響のため、容貌が醜いものは、『怖い』『恐ろしい』『悪』として、人々に強烈に記憶されている。そのせいで、容貌の問題を抱えている人達は、いわれなき偏見、蔑視、差別で苦しんでいる」

確かにとそうだと思う。藤井さんは、「怪談・ホラー映画・番組」の作り手への責任を問うているが、それらの映画や番組を流すテレビ会社を含めたマスコミ全体への責任も入っていると私は考えた。つまり、私達の中にある、「美」に対する感覚、美しいものは良く、上位にあるものという押さえや、「醜い」ものへの嫌悪感やそれらは低く扱うべき、あるいは扱っても良いという感覚を持つことに大きな役割を果たしているのはマスコミであり、それらの扱いが近年さらに過激かつ露骨になっているように考えたからである。そういう意味で、マスコミとの関係で、容貌障害を考える視点を入れてみようと考えた。教材は、パワーポイントで作成し、You Tubeの動画は本来24分のものであったが、45分の授業を考えて、かなり編集し割愛して使った。

○授業を終えて考えたこと

今回の授業を振り返って、やりきれなかったことは二つある。

一つ目は、子ども達が得た情報をもとに、考えや感想を交流すること。何をどう受け取ったのかを交流した時に初めて、共に学ぶことの意

○授業の実際

授業の流れ	指導上の留意点
1．本時のテーマが「見た目問題」であることを知る。 ・私の抱える「見た目問題」について語る。 2．芸能人の名前当てクイズ 写真は、「SEXYZONE」と「桐谷美玲」を用意し、名前を当ててもらう。また、この人たちに当てはまることを四字熟語で表すと何になるかを班で考えてもらう。正解は、「美男美女」。 3．藤井輝明さんについての生い立ちと今の職業について知る。 （5分程度の動画） ・内容は「海綿状血管腫」という病気にかかっていること。そのことによって小学生の時に受けた壮絶ないじめ体験。しかし、それを支え乗り越えさせてくれた母親のサポート。そして、現在は、看護師を育てる大学の先生をしていること。	・1回きりの授業なので、まずは自分の「見た目問題」を語ることで、少しでも自分という人間を身近に感じて欲しいと考えた。 ・マスコミと「容貌障害」との関係を最後に考えるために布石としてと、関係づくりが十分に図られていない子ども達同士が少しでもこの時間の中で話し合えるようにと設定した。 ※授業では、時間の関係でできなかったが、動画に対する自由な感想を交流させたい場面。

4．さらにくわしく藤井さんの生い立ちにせまる。
・50社受けても就職試験に受からなく、死を意識したこと。
・25歳で受けた血管腫を取り除く手術を受けた際に受けた医者からのひどい仕打ち。
しかし、それらを乗り越える力となった母の愛と全くそれまでとは違う方向へと進む機会を与えてくれた恩師との出会い。

5．今でも障害があるがゆえにぶつかるきびしい現実を知る。
・つばをはきかけられることが100回以上あること。
・じろじろ見られることに対して藤井さんが考え出した変わった対応を班で考える。

6．今、藤井さんが力を入れている3つのことを知る。
・患者の痛みが分かる医療にかかわる人を育てる。大学の先生として。
・容貌（見た目）にハンディを抱えている人たちをつなぐ活動。家族会の組織、運営。
・容貌（見た目）にハンディを抱えている人たちへの理解を進める活動。本を書くこと、高校生への講演活動、小学生への出前授業。

7．小学生への出前授業の動画を見る。

8．マスコミと容貌障害のつながりについて考える。
・「SEXYZONE」と「桐谷美玲」の写真を再び提示し、次にお笑い女芸人と漫才師の「NON STYLE」の井上祐介の写真を提示し、同じ芸能人として同じ扱いをされているかを考えてもらう。実際には、そうはなっていない事実を押さえる。
・藤井さんの言葉から、マスコミについて言及している文章を紹介する。
・「美」と「醜」という言葉を提示し、それらに対する感覚を持つ上で、私達はテレビを含むマスコミから大きな影響を受けていることを押さえる。

9．授業の感想を書く。
・死ぬことを引き止めた母の言葉を班で考えさせる。答えを当てることより考え合うことがめあて。自分だったらどうするかと考えてもらうための仕掛け。答えは、「あなたの顔は宝物よ。」である。ここでも母の愛が助けになっている。
・藤井さんの対応を班で考えてもらう。
・それぞれの写真を写し出し、何をしているところかを問い、全体で押さえていく。あまり時間はかけず、小学生への出前授業の動画へとつなげていく。

※授業では、時間の関係でできなかったが、動画に対する自由な感想を交流させたい場面。

※実際には、時間が足りなく、感想を書く時間は取れなかった。

味が生まれると考えるからである。せっかくこの夏に3日間だけ会って時間を共に過ごした仲間とだからでき得る学びの場。そういう場でなければ、この時間をその場を過ごす意味はほとんどない。一人で学んで済むことであれば、それに関する本を読めばよいのである。それは教室ででも同じである。しかしながら、そこが圧倒的に足りなかった。

二つ目は、最後のメディアによる価値の刷り込み問題への突っ込みが浅かったこと。時間がなかったので、教え込みになってしまった。そう考えると、内容的に2時間は最低必要な中身だったかなと、今では考えている。授業の内容としては、それを参観してくれた矢部智江子先生が、次のような腑に落ちる感想を寄せてくれた。

「今回の藤井さんは、自分で何とか克服しましたが、そういう価値観が社会的に作られているという視点と、自分が努力しても、心の持ちようではなかなかうまくいかない場合もあるということも考えたいと思いました。自分の心の持ちようでうまくいくように感じてしまうと、うまくいかなかった場合に、自分を責めてしまうと思うからです。藤井さんの場合は、お母さんが素晴らしかったのと、藤井さんの努力と、医療関係に携われるような才能を持っていたことといろいろなことが関連してうまくいった例だと感じました。心の持ちようの問題と、社会的に

作られた価値観に対してどうするかということを、どうつなげて考えさせるか、難しいですが、考えていきたいところです。」

矢部さんの指摘は、確かにその通りで、困難に遭遇し、それを乗り越えた人を道徳の授業で取り扱うことがあるが、そのような生き方を知った皆が皆、今回取り上げた藤井さんのように前を向いて進むことができる訳ではない。圧倒的には、そうでない人の方が多いのだ。だからこそ、実際に40万人も引きこもっている人がいるのだ。そのくらい現実は厳しい。

そのようなことを踏まえると、厳しい現実があっても藤井さんのように頑張ろうというメッセージだけが伝わることには、非常に気をつけなければならない。しかし、その一方で、藤井さん自身が偏見・差別をなくすための交流・講演活動を熱心に進めているのは、厳しい現実を作り出してきたのも、この社会をつくる一人ひとりの人であり、その一人ひとりの意識を変えることによって誰もが生きやすい社会をつくれると考えるからであろう。つまり、個人は、社会から被害を受ける側面と、加害者として存在する側面の両方があるということだ。そのように考えると、一つの教材でも、いろいろなメッセージが複合的に子ども達には伝わるし、さまざまな視点で捉える必要性がある。今回の授業づくりは、そのようなことも考えられた非常に有り難い機会だった。

○これから道徳の授業をどうつくるか

最後に、2年前の6年生の感想の抜粋を紹介したい。

一つ目は、ホームレス問題についてのKの感想。

「〜今回の話を聞くまでは、ホームレスは路上生活できたないし、じゃまでいやだなあと思っていました。けれど、今回の話を聞いたり、ビデオを見たりして、ホームレスの人はもともと普通の生活をしていて、たまたま病気などで仕事を喪ったからこういう生活になったと知って、その人たちは別に悪くないと思ってかわいそうだと思いました〜。」

かわいそうで終わるのは、一面的な見方である印象はぬぐえないが、事実を知るというラインは超えているだろう。

次に、性同一性障害についてのRの感想。

「〜前に本で読んだことがあり、少しは知識があったのですが、ああそうなんだ程度で終わってしまいました。ちゃんと考えたのは今回が初めてでした。自分とは関係がないと思っていたからだと思います。「男らしさ」とか「女らしさ」って知らず知らずの内に決め付けていて、だいたいみんな同じような考えを持っていました。「男のくせに」とか、「女のくせに」というのは、性同一性障害の人にとっては、ツライんだなって思いました。今は、近くにいないけれど、そういう人に出会ったら、おどろくかもしれないけれど、優しくというか、普通に接したいなと思いました。」

社会に決められた性とのギャップに苦しむ性同一性障害の子どもの動画を見た6年生の子どもたちの多くは、姓同一障害の人と会った時には、「優しくしたい」と書いた。でもRは、「普通に接したい」と書いており、大事な視点だと

考え、学級だよりに載せて、なぜRはそう書いたのだろうと子ども達に投げかけた。その話し合いで明らかになったのは、「優しくする」ということはある意味特別扱いをすることであり、対等な関係を結ぶことにはならないということだった。このやりとりは、全体での押さえではあるが、交流によって一つの認識の高まりがあったと考えることができ、ここまでのやりとりをして取り上げたテーマの授業に一つの区切りをつけていいのだなと今は思う。それは、ホームレスの問題を、「かわいそう」というKの感想で終わらせていいのかということにもつながる。つまり、問題を提示して、それを深く共有する過程と同時に、その受け止め方にも様々な見方があり、時には、歴史的な視点も意図的に教師が入れることもしながら、自分の受け止めを相対化させる視点も重要だと考える。その意味で、丁寧に交流することが道徳の授業には必要だと考える。いやそれは道徳の授業に限らない。そういう意味で、一つの題材で学ぶ価値項目を限定し、1時間単位で次々教材が変わっていく今の道徳の教科書構成には、非常に違和感がある。しかしながら、多忙の中にあって、違和感を持たないまま、新しい仕事に次々取り組まざるをえない自分自身に一番違和感を持つ今日この頃である。

（桜丘小）

わたしの出会った子ども

ひどい先生だった

加藤修二

学校を、教室を、子どもたちを思い出させるものがあるんだなぁ。今日の新聞の小学生の投書。「さくらさん逝去寂しく悲しい」を読み飛ばし、「優しい先生だから授業楽しい」に目がいっちゃう。

そして浮かべてしまう。あのことだ。

新任で5年生の担任でした。始業式の日、何をしたのかまるで覚えていないが、女の子達がグループになって長い廊下を向こうに歩いていく後ろ姿が目に焼き付いてる。女子のグループ化は初めての体験でした。めんどうでした。

休み時間になると、いくつかのグループができてヒソヒソ何かを話してます。男子には、「テメエ、ウッセーんだ」と言葉を投げ捨て、てんで相手にせずです。教室の中は、和やかな雰囲気なんてこれっぽっちもなかった。

「先生。カナリ、コバヤシを好きなんだって」

「先生。4年生のときね、ミッチャンが、ウチらをね……」

ああ、そんなのいいって、取り合ってらんねぇ。先生は忙しいんだ。何たら話す目的で寄ってきた女子の前で赤刷りをめくり、山となった宿題ドリルに意図のないグルグル○をつけ、業間休みの一服を待ち焦がれ、チャイムと同時に職員室へ走った。紫の煙は、目の前の女子の話より美味しかったのだ。

「先生、ショウジがね、掃除しないで……」

女子から総スカンを食らっているショウジへの苦情は、もう耳に入らない。言っても分からないんだ、ショウジは。相棒のゴウケと教室中を走り回り、女子の一人ひとりに舌を

出しては逃げ、鼻をほじった手で、指で背中を触ろうとして追いかけ回す。

そして放課後は靴かくしが待っていた。いつも女子の靴だ。

靴は、ひしゃげた三角ゴミ箱の中やそのかげに、渡り板の下や外の水飲み場の囲いの裏とかにあるのだが、毎回違うところにあると、探し回るのが多大な労力に思えて、ウンザリ感が積み重なっていった。だれがやってんだ！　どうしてうちのクラスにだけ！　と思ったものだ。

生活指導もだめなら、授業もはかどらなかった。患者さんのために雹を拾いにいった看護婦さんを諫める男の、おおよそ子どもたちにとってはおもしろくなさそうな物語の「音読百回」とどっと出てくる新出漢字の「練習、練習」で時間を過ごし、「逆さ割り算すりゃ一発じゃん、まどろっこしい」と倍数、約数をぐちゃぐちゃに教え、体育は、運動会の練習だからと、前ナライの整列とラジオなし第一体操のくり返し。理科、社会は、3回に1回は図書館へ逃げ込んだ。

イライラしていた。教室の入り口で睨み、おこってばっかりだった。さっさと座れ！　しゃべるな！　教科書を出せ！　朝練に遅れるな！　給食を残すな！　掃除をちゃんとやれ！　……オイ！

6月。水曜日だった。チャイムが鳴っても座らない女子に怒鳴った。

「勉強したくないんだったら、屋上へ行ってろ。遊んでたらいいさ」

マンモス学校の八幡小の屋上は出入り自由だった。写生にも学級会の持て余した時間にもよく行ったものだ。ボクは、行け！　と追い立てるように女子を押し出し、そして率いて屋上に着いた。

もどった教室は半分というより、スッカスカだった。男子はおとなしく待っていた。そして算数を勉強したいと言ったっけ。ボクも興奮してたのだろう、一人ひとりの席を走るようにしてまわり、まるでうまくいってる先生と生徒のような錯覚を感じながら計算の仕方を教え、練習問題をたくさんやった。女の子に押さえつけられていたコミネやヒライズミは、こういう勉強したかったと喜んだ。

男子は給食準備もハリキッた。オレ達は勉強もしたし女子の分も準備したという優越感があったのだろう。連れ戻しは簡単だった。

「給食だからもどりなさい」と言っただけ。

屋上で何をしてたかも聞かなかった。校庭を見ていたカカズ達はつまらなそうだった。ふり返るとブスッとして付いてきた。そしていつもと同じダンマリ授業で、5時間目をつき合って帰っていった。

さて次の日。家庭からの連絡帳も電話もなかった。女子の屋上放置のことを話すと、ハセガワ主任は、「加藤さん、教室を投げないで」と上にも報告せず腹に収め、学年の同僚は大笑いした。「加藤さんらしい」と。

1年目は辛かった。子ども達とうまくいかないし、まともな授業もできなかった。授業参観で、漢字の書き取りをして市販テストをしたこともあった。子ども達は、じっとつまらなさに耐え、怒鳴り声に辟易しながら1年を過ごした。「センセ、たばこ臭いから女子に嫌われるんだ」と教えてくれたユユにも応えられなかった。学級崩壊の一歩手前だった。

遠い子ども達との距離を縮めてくれたのは、休み時間のゲームや放課後の手打ち野球だった。恥ずかしい話だが、遊んだ子ども達の優しさにすがって授業をくり返していた。

このまんまじゃいけない。授業を何とかしなきゃという思いが焦りになり、日に日に大きくなっていったのは、苦い毎日の中の、ちょっとだけ、いい思い出かも。

ボクは、30点の教師から出発しました。

（元教員）

宮城の教師 2

「門真 隆」と子どもたち

〈企画『宮城の教師』を始めるに当たって〉
宮城の数多くの先達の中から、今の教師たちにも学んでほしい教師の姿や実践の記録を紹介します。元同僚やサークルなどで共に活動してきた方や教え子に語っていただきます。

三つの物語をともに歩んで

大槻邦敏

門真先生と最初にお会いしたのは仙台市教職員組合の教研集会だった。

海外日本人学校勤務を終えて帰国し、教職7年目に入っていた。そろそろ本格的に教師としての勉強をしなければ、人として堕落するのではないかと思いはじめた頃だった。隣りの教室の若い女の先生から、「一人で行くのはかっこ悪いから」と誘われて、はじめて集会に参加した。当時すでに門真先生は国語教育の実践家として知られていたらしく、私を誘ってくれた彼女は50人くらいの参加者の中の一人を指さし、「あの坊主頭の先生の話すこと、しっかり聞いたほうがいいよ。すごく勉強になるから」と注意してくれた。それが門真先生だった。当時、作品の読みには自信があった。分析批評という読み方を学生時代から学んでいたので、文学作品の深読みは得意だった。というより、それしか自分にはなかった。当然、この日の集会でも作品の読みが問題になった。それまで6年間、市の指導主事、カイロ日本人学校の保護者（東大、早慶などの文系卒業者が多く、みんな優れた読み手であった）たちと、小中高の教材になっている作品の読みについて話し合ったことが何度もあったが、自分より深く作品を読む人はいなかった。が、この日の門真先生は明らかに自分より深く読んでいた。教職7年目にして私は自分より深く文学作品を読む人間に出会えたのであった。それから門真先生が参加している仙台国語サークルに入れてもらい、第1の物語が始まった。

門真先生は40代後半に入ったばかりだった。このサークルには春日辰夫先生や斎藤章夫先生も参加されていた。私はここで、読み方指導の原則などを学んだ。そしてすぐに、「オレらよりすごい読み手がいる」と宮崎典男先生のところへも通うことになった。

同じ年の秋から、宮城教育大学の現職教育講座が毎週月曜日の夜に開講されることになった。勤務先の小学校で受講希望者の募集があったので応募していたのだが音沙汰なしだったので、希望者が多くで受講できないのだろうと思っていた。しかし、門真先生は「大丈夫、行って、文学と言語の講義をきこう」と誘ってくれ

た。橋浦兵一先生の漱石論と奥田靖雄先生の文法論だった。多くの国語教師と同じく、私も文学には関心があったが、言語・文法には興味はなかった。門真先生は当時すでに「文法を知らなければ作品は読めない。たとえ読めたとしても授業はできない」と信じていた。この時、門真先生がそういうのならとしぶしぶ宮教大に行き、奥田先生に出会ったことが、私と文法との出会いとなった。橋浦先生の講義は学生時代に受けていた。そして、その温厚で誠実な人格は尊敬していたが、いわゆる作家論的な読みに満足しない学生の一人だった。個人的にお話したことはなかったが、先生もそのような批判があることはご存知だったらしく、現職教育の受講生には「学生はすぐ卒業しますが、みなさんはそうではありませんので、私も勉強し直してお話します」と作品中心の講義をしてくださった。ある日、講義が終わるとすぐ、門真先生が「今のは分析だ」と私に言ったことがあった。門真先生はその日の講義が、読みの形象の知覚のレベルをこえていると判断したのだろう。私はそのとき、「研究者の読みも小学校の読みも変わらない。それにしてもオレは小中高とずいぶん国語の授業を受けてきたが、読み方そのものは教わらなかったなぁ」と思ったことと、門真先生の読みの深さを物語る一コマとして心の底に刻み込まれている。

後年、全国の国語教師・日本語研究者と交流するようになってから、私が宮教大卒なので、「文法は学生時代から勉強しているんでしょう。素人離れしている」とよく言われたが、教職7年目にして門真先生に誘われて現職教育講座に参加したことが、私の文法学習の始まりである。奥田先生の講義は、先生が書き上げたばかりの論文の講義だった。内容はその時点では最先端をいくすばらしいものだったが、私たち現場教師にとっては読みやすいものではなかった。門真先生は、論文の記述を小学校の教材に当てはめて、その正しさと疑問点を奥田先生に尋ね、私にもそのやり方を勧めてくれた。これは70歳を過ぎた今でも、私の論文を読む方法として、私を進化させている。

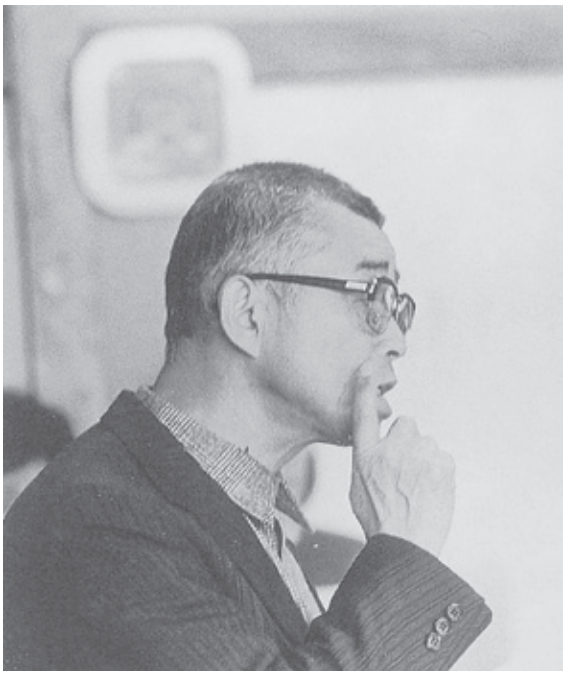
翌年から、毎週のサークルでの学習に加えて、冬の学習会、県の教育研究集会、高教組との合同教研、夏と冬の教科研国語部会の研究会にも、門真先生に誘われて参加した。これが第2の物語である。当時はすべてが泊まりがけであった。門真先生はお酒を飲まないので、毎晩、集会の夜は、その日に報告された内容を枕元に並べて日付が変わるまで再学習するのが常だった。私はここでも数多くのことを学んだ。「ごんぎつね」「一つの花」「あしたはてんきだ」「ヒロシマのうた」、文法指導などについて、門真先生はご自身が数多くの集会で学んできたことを教えてくれたのだった。このかけがいのない私の「大学」は、教育会館、志津川と石巻の古い旅館、新潟瀬峰温泉のスズキが池ホテル、白石小原温泉いずみ屋を会場にして、年5回、規則正しく繰り返された。県教研・合同教研には宮崎典男先生が、加えて東北民教研には岩手の加藤光三先生、山形の板垣昭一先生と、当時の読み方指導の実践者として全国に知られていた先生方も参加されていた。

教科研国語部会の全国集会には国分一太郎先生をはじめ、群馬の篠崎五六先生、奥田靖雄先生、鈴木重幸先生、上村幸雄先生、宮島達夫先生、高橋太郎先生など、文法・語彙論・音声学の日本を代表する研究者と、それぞれの所属される大学や研究所に学ぶたくさんの学生が参加していた。

後年、日教組の全国教研や、官制の東北大会・全国大会でも発表・報告をしたりしたが、あの頃の教科研国語部会の全国集会ほど、日本語の研究、読み方研究の専門家が出席したことはなかった。門真先生と私は日本の最先端をいく先生方の話を、教材に当てはめて繰り返し勉強したのだった。

現在もそうであるが、日本語の真実の姿を捉えていない学校文法に満足しない進歩的な教師は、明星学園に学んで「にっぽんご４の上」を勉強、実践していた。宮城県では「教室で教えたいが時間がとれない」という教師が多くいた。そこで春日先生や門真先生たちは、「一つのテーマを15分で教えきれる文法テキストを作れないものだろうか」と奥田先生に相談した。それで「宮城版文法テキスト」をつくることになった。第３の物語の始まりである。月１回、はじめは宮教大の奥田先生の研究室で行われたが、次第に奥田先生の都合に合わせて、教育会館や、三文字先生の働きかけで、古川の教育会館、女川の民宿など県内各地や、新潟村上市の言語学研究会の合宿所で泊まりがけで行われるようになった。

文法の各分野のそれぞれのテーマについて奥田先生が最新の研究を踏まえて規定をつくり、参加者がその用例を集めるという形になっていった。この最新の研究を取り入れるということから、「15分で教える文法テキスト」という当初の目的が、いつしか「にっぽんご４の上」の改訂版作りが目的となった。やがて東京から内藤哲彦さんと高木一彦さんも参加されるようになった。宮城県版ということで、毎年、教科研国語部会の全国集会でテキスト案を報告することになり、私たちは、規定とそれに関係する言語学研究会の先生方の論文を読んで勉強した。このテキストは２０１４年に「あたらしいにっぽんご」として出版され、現在、日本語の最も優れたテキストとして全国各地で実践されている。



このようにして、門真先生とは先生が40代後半から退職され入院されるまで三つの物語とともに歩ませていただいたが、最後に、門真先生が人の長所を見出し、それを心から尊敬するという、先生の性格についてふれておきたい。門真先生ご自身は「オレは国語だけでいい。ほかのことまで手がまわらない」といつも口にしていた。が、自分とは違う生き方をしている実践家を深く理解し尊敬していた。身近な人として、春日先生の国語以外の授業に対する見解の深さを、「あれが春日さんの読みを深くしている」と私には口にしていた。また芳賀直義先生や斎藤敬一先生のように教育全般や学校というものの、あり方を追及されている先生方を心から尊敬し、「ああいう人たちがいないと学校は変わらない」といつも言っていた。宮教大の現職教育のとき、奥田先生が「急用ができたので休講」ということがあった。橋浦先生ならば前もって連絡するんじゃないかと出席者で話をしていると、門真先生は「彼は学問に対して誠実だ」と、奥田先生の行為を非難しなかった。

これらのことと関連して、私は門真先生の最後の授業を忘れることができない。あの落ち着きのない子を片手に抱えて黒板の下まで連れて行き、片手に子ども、片手にテキストという形で最後まで授業ができた。私が注目したのは、あの子が門真先生に逆らうことなく黒板の下で抱

えられて授業に参加したことである。もっと反抗して教室を走り回ったり、廊下に出ることはしなかった。あれは門真先生が普段からあの子の良いところを見出し、それをあの子に伝えていて、あの子は自分が門真先生に認められていることを知っていたことを物語っていると私は思っている。世界的な言語学者や県を代表する実践家と一年生の問題児を同列に扱うようで申し訳ないような気もするが、門真先生の人の見方の特長を表す光景として忘れられない。

（元教員）

演劇の中に登場する門真先生

芦澤紀子

「門真先生のことを書いて」と話をいただいた時にすぐに劇団「ＩＱ１５０」を主宰して活躍している丹野さんに話を聞きたいと思いました。１９９６年７月発行の『こどもと生きて・門真隆ひとと仕事』に思い出を書いている門真先生の東仙台小学校時代の教え子さん。私はまだお会いしたことがなかったのですが、門真先生の教えを受けた世代が今の時代をどう生きているのかを知りたいと思ったのです。劇団を通して連絡をとってみると、

「門真先生という名前聞いただけで胸がキュンとなってしまいました」と。

「先生と過ごした小学校時代のことを回想する場面を入れた『東仙台物語』というシナリオを書いて公演したことがある」とも。

送ってもらったＤＶＤ（２００３年、愛知県芸術劇場演劇フェスティバルの参加した時の映像）を観て涙が出てきました。劇中に門真隆先生の話が出てくるのです。

東仙台というところに住む中原家、ちょっと変わった大家族の物語。何十年ぶりに出会った東仙台小学校の同級生、中年になっている梅子と泰平。泰平は糖尿病で治療中。粗大ゴミとなって段ボールの中に入れられて捨てられていたところを中原梅子の娘たちに拾われてきている犬。

梅子「泰ちゃん犬飼ってたよね。ほら白い犬」
泰平「飼ってた、飼ってた。」
梅子「マジックで眉毛かかなかった？」
泰平「あ、あれ、最初、目の回りに、こう、丸書いたんだよ。で、なんか、もの足りなくなってさ」
梅子「可哀相に」
泰平「笑ってる顔になったよな。笑う犬。」
梅子「毎日一緒だったよね、あの犬と。授業中、いないんだもの。校庭、走り回って」
泰平「給食の時間になると、教室に戻って」
梅子「よく許してくれたよね、門真先生」
泰平「そうだよなあ……」
梅子「あたし、先生に指されると、立ったまま真っ赤になって、何もしゃべれなくなって、みんなに笑われて、それで泣き出して」
泰平「うん」
梅子「先生が持ってきてくれるちいさい物語が大好きで、いつも楽しみだった。あの、ガリ版刷りの、先生の手書きのやつで。「ごんぎつね」とか、「べろだしチョンマ」とか。「べろだしチョンマ」なんかすごく悲しくて、可哀相な話でね、読みながら手が震えて、もう、ワンワン泣いたっけ」
泰平「いつまでも泣いてたよな」
梅子「教室中のみんなに笑われて……でも、門

真先生だけは笑わなかった」
泰平「俺等ふたりとも、問題児だったからな。いつもかばってくれたの、門真先生だけだった」
梅子「そうだね。先生のお蔭で、やっと人前で話せるようになったし。いまでもね、くじけそうな時にね、『頑張れ、頑張れ』って、あの声が、先生の声が聞こえてくるんだ……」
泰平「先生怒る時さ、ここんとこが、グツグツって動くんだよな。歯くいしばってんのわかるんだよ。それがおっかなくてなぁ」
梅子「そうそう」
泰平「俺なんか、いたずらばっかししてたから、しょっちゅう怒られてたけど、でもさ、怒った後、すごい優しいんだ、先生」
梅子「あんな先生、他にいない。今でも大好きだもん」
泰平「俺等、良かったな」
梅子「うん。しあわせだね」
泰平「…まだまだ、生きないとな」
……とこの後二人がそれぞれに「頑張れ、頑張れ…」「頑張れ、頑張れ」「頑張れ、頑張れ」……と唱和する。

丹野さんに原稿を依頼しようと思いましたが、彼女は、今、専門学校の講師として忙しそうでしたので遠慮しました。ＤＶＤに同封されてきた丹野さんの手紙に門真先生のお人柄も教師像もとても良く文章化されています。

門真隆先生は、私にとって忘れられない先生です。東仙台小学校で先生にお会いできなかったら、私は58歳にになる今でも、人とうまくお話もできない、泣いてばかりのいじめられっ子だったかもしれません。まして、演劇の道を歩むなんてことは、ありえなかったと思うのです。

身長１１２㎝、体重20㎏。小学５年生にしては病的に小さかった私は、クラスのみんなから見ても、変で気持ち悪いチビだったでしょう。……中略……。学校の授業では、みんなの前で先生にあてられると、それだけでドキドキして顔が真っ赤になり、声に出して教科書を上手に読めない子供でした。そんな時はいつもみんなに笑われていました。……略。

私は門真先生の授業がいつも楽しみでした。中でも、「ごんぎつね」と「べろだしチョンマ」は、忘れられない作品です。

いつものように音読の途中で泣いて、あげく大泣きして読めなくなってしまった私は、その日の放課後、職員室に呼ばれました。私は先生に叱られるんだと思いました。でも門真先生は私を叱りませんでした。「くみちゃんは、本を読むのが好きなんだね。本の内容をよーく分かって、その中に出てくる人たちの気持ちがよーくわかるんだね。だから、かわいそうになって、悲しくなって、泣いてしまうんだよ。それは、恥ずかしいことじゃない。それはね、とっても素晴らしいことなんだよ。」先生はあのギョロっとした優しい目で私をじーっと見つめて、それから私の頭をポンポンとやさしくたたいて、「くみちゃん、いいか、忘れるなよ。」と言ってくださいました。……中略。

門真先生と呟くだけで、勇気がわいて、でもやっぱり涙が溢れてきます。ゴマ塩坊主頭の、色の黒い、スマートな剣道着姿の「がんばれ、くみちゃん！」と励ましてくださったあの声。…後略。

昭和40年頃の小学校「あの頃にはいじめなんて言葉もなかった。門真先生が今の学校にいたら、いじめなどなんとかなるかもしれないよね」と丹野さん。

丹野さんと話しながら、当時同学年をした時の門真学級の子どもたちがみんな魔法にかかったように、先生大好きになって、お母さんたちも笑顔になっていく。１年生の子には１年生の子の目線にしゃがみこんで話を聞いていらっ

しゃった姿が目に浮かびました。大人になった教え子たちは、丹野さんのように門真先生の天国からのエールを感じながら、今の時代を懸命に生きているに違いありません。

（元教員）

門真隆先生の「文学作品の読み」について

齋藤章夫

「文学は人生の教科書」だと知ったのは、教師になってサークルに入ってからだが、それを何となく感じていたのは大学にいた頃だったような気がする。自分は何を善悪の基準として生きていくのか、どんな教師になろうとしているのか、とにかくそれを文学のなかに求めて乱読していた。宮沢賢治に大きな答を得たような気がして、とにかく教師になったのは、昭和47年4月だった。最初の赴任地の東仙台小学校で職員に紹介されたとき、目の前にいた坊主頭の初老の男教師が門真先生だった。そのやさしい眼差しに自分の理想と通じ合うものを感じたので、門真先生に勧められるままにサークルに参加した。あれから47年が経過して、門真先生も鬼籍に入られてすでに26年も過ぎてしまった。私の頭の中から門真先生が消えることは1日としてない。様々なことをつい昨日のように思い浮かべることができるが、ここでは若い教師のみなさんの国語の授業にいくらかでも役立つようにと、門真先生が残された「文学作品の読み」についての仕事を紹介することで責を果たしたいと思う。

「文学作品の読み」とは何か？に関わって篠崎五六さんの言葉から「読みの授業のなかで、子どもたちに豊かで正確なイメージづくりをすること」、宮崎典男先生の「ことばを意識し、それを自己の記憶とむすびつけ、テキストのコースにしたがって登場人物の心理を想像し、知覚するという作業」また「文法を知らない読みの教師は、私だけで終わりにしたい」という宮崎先生の言葉も常に念頭にあったように思う。これらの言葉を念頭において、門真先生は「文学作品の読み」をどう考え、実践していったのか、残された報告をもとに紹介したいと思う。

Ⅰ　単語の意味からイメージへ

形象を読み取らせるために「語句や表現の調べ」をする。その個人調べの段階で、「作品に自分の目で当たり、辞典や既有の力で読み解く努力をさせる」というもので、「単なる語句調べに終わらぬよう、作品の形象把握につながらせる」ことを考えた方法である。（山形の板垣昭一さんの報告より）

単語や語句を文脈の中でとらえてから、その単語を文脈の外に取り出し、Aとして辞書の意味をつかみ、もう一度文脈に入れて、Bとして、文脈に即してイメージを作ることを、いわゆる「単語調べ」として子どもたちにやってもらったらどうだろうと思う。

「大造じいさんとがん」で、がんは「いじょう」なしとみとめると初めて飲み込んだらしいとある。その「いじょう」について、

A…ふつうではなく、どこかかわってるようす

B…今、えさ（たにし）をあさっている場面だから、くわえてひっぱってみて、たにしがいつも沼でとっている時と同じなら「いじょうなし」だし、くちばしでひっぱってみたら糸

がつながっていたら「いじょうあり」だから飲み込まない。

「おとりのがんがこちらにむきをかえる」のを、はやぶさが「その道をさえぎって」とある。「さえぎる」について、

A…途中でじゃまする。

B…「その道」は、おとりのがんがじいさんの口笛でこちらにもどってくる道であり、「さえぎる」は、おとりのがんの飛来を攻撃するイメージである。

「残雪がとびさっていくのをはればれとした顔つきで見守って」いるところがある。「はればれ」について、

A…すっかりはれたようす、曇りなくさっぱりしたようす。

B…がんの英雄よ、おまえみたいなえらぶつを…と思う残雪を、隼との戦いの最中ねらった自分をおしとどめ、これから猟師として知力と技量のかぎりをつくして戦えることの満足感からにじみ出るはればれとした表情

ある動きは内面の反映とすれば、イメージを積極的に作っていく努力は、おのずと子どもを内面の読みの面にも近づけていくことになるだろう。そういう場をノートの中に作り、その場で子どもが奮闘することを期待したい。

Ⅱ 「心情」「気持ち」の読み

結びつけて読む

（「サーカスのライオン」を例に）

A…「…ようし、あした、わかい時のように火のわを五つにしてくぐりぬけてやろう。」

B…「おこづかいもたまったんだ。あしたサーカスにくるよ。火のわをくぐるのを見にくるよ。」

C…「ライオンがすきなのかね。」「うん、大すき。それなのに、昼間みた時は、なんだかしょげていたの。だからおみまいに来たんだよ。」

D…「今日のジャンプなんて、元気なかったぞ。」「そうともさ。毎日同じことをやっているうちにわしはおいぼれたよ」

E…テントのかげのはこの中でじんざは1日中ねむっていた。……夢の中でじんざは風のように走っていた。

じんざは広い草原を疾駆したかった。だがそれはかなえられることなく、無為に老いていく自分を悲しい思いでみているほかはなかったのだ。だが「おいぼれ」と思っていたものを男の子は「しょげていた」と感じてくれた。その言葉にすがってじんざは、もう一度ライオンとしての自分をとりもどそうとしたのだろう。「体に力がこもり、目が光り、火のわを5つくぐりぬけてやろう」と思った。「やろう」は男の子のためだけでなく、まさに自分への挑戦だった。そこまで読まなければならないと思う。

Ⅲ 登場人物の性格を読み取る。

文法「…のです」にこだわって

（「ヒロシマのうた」より）

「ヒロシマのうた」の文体の特徴として「のです」がとても多く、そのことが作品の叙情的色あいを強めていることは指摘されていましたが、それ以上には出ず、読み取りとかかわっては大きな問題とはなりませんでした。でも最終段階では、冒頭の「その時、私は水兵だったのです」について、説明と記述ということにふれているのは、その頃進んでいた文法書づくりで教えてもらったにちがいありません。

説明的な文を表す「…のです」についての文法的記述（説明をうける記述があたえられていない場合）

そこに説明的な文があるということは、説明をうける事実が先行する文によって、あるいは場面によってすでにあたえられているということである。ところが実際には、先行する文でじゅうぶんに明確なかたちに説明をうけるべき事実

があたえられていないばあいがある。そういうばあいには、よみ手がそこのところをひろい文脈からよみとらなければならないだろう。（どうよみとるかは、よみ手の能力にかかわっている）

「その時、私は水兵だったのです。」

前にもふれたように、この文は「ヒロシマのうた」の冒頭にある。「じゅうぶん」どころかまったくあたえられいない「説明をうけるべき事実」を「よみ手がひろい文脈からよみとらねばならない」が、それと同時に、なぜこういう表現をしてわざわざ作品の冒頭にもってきたかということを考えなければならないのではないかと思いました。問題は次の2点になります。

①「その時私は水兵だった」ということを、どんな事実に対して語ったのか。

②「水兵だった」ということをなぜ最初に語らなければならないのか。

2つのことは、別の問題ではなく、①が明らかになっていけば、おのずと②の方も明らかになってこよう。そんな感じをもって作品全体、特に「その時」といわれた原爆投下直後の広島の場面をながめなおしました。

まず、もう一度「水兵」とはどういうものか考える。そして、その水兵として外的な状況とどんなかかわりをもち、どんな行動をとったか読み直してみます。

〝上官の命は、朕が命（令）と心得よ〟という軍隊に、命令と指示によって行動しなければならない最下級の兵隊として位置づけられる「私」、逆にいえば、上官の命にしたがってさえいれば、何の責任を感じる必要もなければ何の責任をとることもない「身分」、それが「私」のおかれている「水兵」なのです。

そういう「私」が「どんな状況」にぶつかり、どんな行動をとったか、「水兵」とのかかわりであげてみます。

＊軍医が「水をのましゃいかんぞ」というが、私はとめない。自分で判断して動いている。

＊生きている人だけテントに運ぶ。それもただ集めるだけということに呵責を感じている。命令だから自分に弁解できるのに、そうはしない。

＊くたくたになっているのに、赤ちゃんの泣き声で目をさまし、起きてさがす。「生」への畏れ。

＊赤ちゃんが女の人にだかれているのを見て、足がすくむほどの感動をうける。

＊ねむりこんでいくお母さんをはげます。

＊お母さんがしっかりとだいていた赤ちゃんを、預かりきれないとわかりながら、もぎとり、

軍隊の規律を破ることを知りながら、持ち場を離れ、受けとってくれる人をさがしに出かける。

＊どこに行っていたのかと聞かれ、ぶたれるのを知りながら言わない。

以上、①私のとった行為は、戦時下の軍隊の「水兵」という身分においてのものだったということを知って読んでほしかったこと、②「水兵」の行為であることで、戦争というものの悲しさ、軍隊のもつ非人間性をいっそうあらわにしたい、そういう思いがあったのではないかと思います。

Ⅳ　分析して主題にせまる

（「ごんぎつね」を例に）

いくつかの場面は、ただ漫然と配列されているのではなく、何らかの関係と作品の中での役目をもってそこに存在しています。それを構造とよぶなら、その構造を明らかにすることが他の場面の作品の分析の重要な内容になります。それぞれの場面がどんな関係と役目をもっているか、具体的に作品にそって考えてみます。まず「ごんぎつね」の場面をあげます。

＊ごんぎつねの説明…ひとりぼっちの小ぎつね

…いたずらばかり（説明部）

1　ごんのいたずらの場面…2、3日ふりつづいた雨からやっと解放された後のなんかくみしやすい感じの兵十へのいたずら（はじまり1）

2　ごんの後悔の場面…兵十のおっかあの葬式に出会い、いたずらを後悔する。（はじまり2）

3　ごんが兵十への思いを深める場面…おれと同じひとりぼっち…いわし…かわいそうに（おこり）

4　ごんの心が兵十へ傾斜していく場面…自分のやっていることを知ってほしくなる…危険を承知で近づく（つづき）

5　ごんの死と兵十が呆然とする場面（やまば）

6　青いけむりで象徴する場面（おおづめ）

説明部をのぞいて、このように6つになると思いますが、この6つの場面が結びついて「すじ」を作っています。主題はその「すじ」にも反映していますから、伝統的な「すじの分析」といわれる方法にしたがって、場面の関係や各場面のはたらきを考えてみます。

⑴はじめに「やまば」をつかみます

「やまば」は対立する生活のぶつかり合いがもっとも緊張するところであり、主人公の運命にとって決定的な意味をもつところです。とすれば、誰が見ても、5の兵十が「またぬすみにきやがったな」とにくしみでごんをうち、そこではじめて、栗やまつたけの贈り主がごんであることを知る場面になるでしょう。「やまば」がわかると、それとの関係で、場面の役目や位置がはっきりしてきます。

⑵「おこり」をつかむ

「おこり」は事件のそもそもの発端で、各登場人物の生活や人間関係に変化をもたらす重大な出来事のあるところです。ごんの死ぬ「やまば」から、ごんがなぜ兵十にうたれるようになったかと逆にたどっていくと、ごんがだんだん兵十に近づいていっていることに気づきます。人間に対する警戒を忘れないごんが、なぜそんなにまで兵十に近づいたのかと、さらにさかのぼりますと、大きなポイントが二つ見えてきます。一つは2の、いたずらをして兵十に悪いことをしたという「後悔」であり、もう一つは3の、ひとり麦をとぐ兵十に「おれと同じひとりぼっちの…」という思いをいだいたことです。どちらも強い関係をもっていますが、私は次のようなことから、「おこり」は3だと思っています。

母をなくして兵十がこれまでの自分と同じひとりぼっちの境遇になったこと、兵十のさび

しそうな姿をみて、自分がこれまでどれだけさびしかったかをあらためて感じたことがそのあとのごんの行為を引き出しているのではないでしょうか。

(3)「おおづめ」をつかむ

「おおづめ」事件の解決の結果をもたらされた状態です。これはふつうの「やまば」との関係でそうむずかしくなくとらえられますが、ごんの場合は少し迷います。つつ口から青いけむりが細く出ているところでしょうか。「おおづめ」は問題の結論を出し、事件や登場人物に対する思想的な態度、理想を示しているといわれています。とすればこの「青いけむり」が意味するものをさぐらねばならないことになります。「おこり」「やまば」「おおづめ」が作品の骨格をなします。分析もそれにそっていくわけです。

(4)「はじまり」は「おこり」に先行するできごとです。後悔に先行することは「いたずら」です。

(5)「つづき」は「おこり」と「やまば」をつなぐ部分です。

ごんが自分のやっていることを兵十に知ってほしくなったこと、兵十の思いを知りたくてついていったこと、かげぼうしをふみふみついていったことなどです。

作品をこのようにとらえ、もう一度全体を見直してみます。ごんはさびしさのゆえにいたずらをし、そのいたずらによって同じ境遇になった兵十に徐々に徐々に近づいていきます。一方兵十はうなぎをとられたたった一つの経験から、ごんにはついに「ごんにくし」以外の感情をもてなくなっている人間です。こういう二人が出会うのですから、破局にむかうのはとどめようがありません。「はじまり」から「おおづめ」にむかってそれぞれの場面が必然的な関係をもって配置され、その中で二つの性格が出会い、ぶつかり合い、結末をむかえます。

「人間同士が理解し合うことのむずかしさ」が惻々として胸にせまってくるとともに、幸せ薄かったごんの生涯が青いけむりの中に投影されて心に残ります。

門真先生は、感情的、感覚的な「読み」に流されず、科学的、客観的に「読む」ことに徹していました。それがどの子にも「読みの力」をつけたいという教師としての情熱だったと思います。

（元教員）

貴重な一か月

中村　真知子

出張で訪問したり、ただ、わきを通り過ぎたりするだけでも、何か胸の奥がざわめいてくる学校があります。それは、木町通小学校です。

もう、とってもとっても過去の話になってしまうのですが、私はこの学校の門真学級（三年生）のクラスで一か月間教育実習生として過ごしました。

「モンマったらね……」

「モンマってばさ……」

休み時間になると私のところに集まっては女の子たちが門真先生のあれこれを話してくれました。内容は、先生のなってないというところ

を話してくれるのですが、その語り口の軽さ可愛さ、私はおかしくておかしくてただ頷くばかり。モンマが大好きですという気持ちが十分に伝わってきました。

そんな屈託のなさそうな彼女たちに囲まれてはいましたが、授業中の一人ひとりの取り組みの度合いなどはまちまち、みんなが一斉に何かに集中するわけではなく、ほんとにみな違う。そんな人たちにどう授業を進めていけばいいのかほんとうに不安でした。

その時の分厚い実習ノートをまだ私は持っています。中には、門真さんのコメントもびっしり。この原稿の依頼を受けて、絶対忘れられない門真さんの一言がその中にあるはずだと探してみました。みつけだしました。「暗闘」という言葉です。

M君のこと【まだ気づいていない子かもしれませんが奇妙に「おかしいことがすき」な子です。といって何のことかわからないでしょうが、ちょっとのきっかけで笑いたい、おかしくなりたい気のする子です。このごろそれがエスカレートしているみたいで今、授業中も遊び時間も日記の時も集中していません。何かきっかけを見つけては、はみ出そうはみ出そうとしてる感じで、どうにかして……と思っている私との間に暗闘がつづいています。（これはこっちだけ思っていることですが）】

私もその後の教師生活で、自分だけ「暗闘」と思いこんでいる何人もの子たちに出会うことになりました。気にかかる子どもに出会うと心の中で「アントウ」と呟いていました。つい、頭ごなしに叱りそうになった時にも、この子はなぜこんなことをするのだろうと、自分の心を落ちつかせる魔法の言葉は門真さんが実習ノートに書いてくれたこの「暗闘」という言葉でした。でも、実際のところ、魔法の効力が利かないことも何回もあってその度に落ち込んだものでした。

今回、読み返してみたら、あとの方にM君を音楽の時間に叱ってしまったことについてのいきさつも、言葉のやり取りを含めてノートには丁寧に書いてくださっています。

そして、ページを繰りながら発見したこと。授業についての覚書、その他もろもろのことに、子ども達の名前が登場していました。〇〇のこの発言は一汽車遅れだけど、とても大事なことをついているとか、階段で女の子を押してしまった子は、「加減のできないところがあるのです…」など。

考えてみれば、授業をしてみることだけでも手一杯の実習生である私が何とか実践できたのは、門真さんが授業を通しての子ども達の状態、時にはその子のバックグラウンドにも触れてくれたおかげだったのだと今更ながら気付かされている私です。

模造紙いっぱいに「かきどろぼう」の本文を書いて、書き込みをしながらの授業。思い思いに呟く言葉や発表にその都度「うーん」と考え込む門真さん。

私も、「モチモチの木」の授業をそうやって進めました。

最後にむかえた、実習の総仕上げの研究授業は「モチモチの木」。この授業について、検討会では、参加してもらった方に言ってもらうのが大事なので発言をひかえたのでと、ノートの方にはほんとに細かく丁寧に数ページに渡って書いてくださっていました。こんなに暖かく詳しく授業について助言してもらったのは、後にも先にもこの時だけだと言い切れます。そして、最後のページには、教頭先生は「指導教師の授業よりよかった」といいました。子ども達は「門真先生と同じくらいわかった」といいました。この一時間にかけた努力の結果でしょう、ご苦労さんでした。と、とても大きな字でコメントが書かれていました。

国語の集まりの時だったか、門真さんが頭を

かきながら言っていたことがあります。「宮崎さんが、新学期が始まって1か月もたつとしっとりと落ち着いてくるクラスもあれば3か月たってもそうならない組があると言ってたけど、いつも後者になるんだよな……」と。

私の教師生活を振り返ってみると、少人数の時にはばっちり授業を進められたのに、担任したクラスは、どちらかというと、後者の方だったような気がします。なるほど、門真学級で学んだのだからと今ごろ合点がいく私です。

ところで、「こどもと生きて」という門真さんの本が我が家には2冊あります。1冊を、夫がプレゼントされたからなのです。そのことをすっかり忘れていた私でしたが、添えられていたお手紙には次のようなことが書かれていたのです。

――省略――○○が少人数のクラスで、又、クラブでお世話になりました。……先生の授業を参観で見せて頂いて……授業の展開が楽しくひきこまれました。いつか機会があったらわたしのもっている本を先生に読んで頂きたいなあと思いながらこの日になってしまいました。……「こどもと生きて」という本は、わたしが6年生の時に担任をしてくださった先生からプレゼントされ、そのあと、とても感動したので、その先生から購入していた本です。門真隆先生は、私が小学四年のときに受けもって頂いた先生で、ガリ版で「野菊の墓」「ベロだしチョンマ」「ごんぎつね」などを学んで。国語のおもしろさをはじめて知ったことがあります。先生が教えていかれる中で参考にできるものがあればという気もちでプレゼントします。これからも子供たちに学ぶたのしさを教えてください。こころから感謝をこめて。

○○の母より

実は、子どもをほめるのがとても苦手だとも言っていた門真さん。でも、とってつけたようにほめている時間があったら、とにかく教えることに向き合う方がよっぽど大事。子ども達の反応に神経を張り巡らせて、ひたすら中身に打ち込む。

そんな門真さんの教師としての毎日毎日の仕事が、巡りめぐって我が家の蔵書を一冊増やしてくれることになっていました。

このことを報告すると、また「んー」と言いながら照れ臭そうに頭をかくに違いありませんね。

（元教員）

門真先生の思い出

平間節子

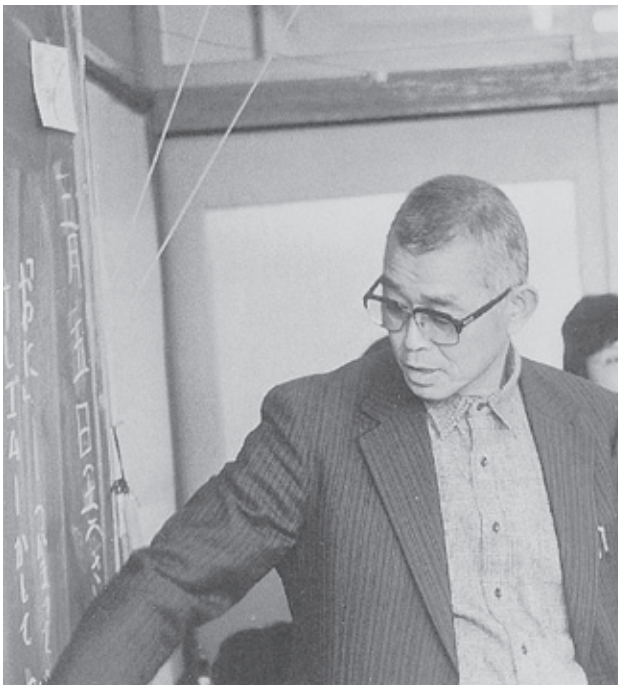
門真先生と言えば、勤務しておられた木町通小学校で、夕方に行われていた国語サークルでの、そして民教研での姿が目に浮かびます。

坊主頭に手をやって、控え目に考え深く、「ン、でもオレさぁ、こう思うんだけど……」と話されていたのを、昨日のことのように思い出します。

私が連坊小路小学校に勤務していた時、夏の教研集会で「名前をみてちょうだい」の授業をすることになり、何度か指導案を見て頂きました。その頃私は、岩沼の芳賀先生のサークルにも参加していて、その関係で指導案を少し書き換えました。最後の指導案の検討会の時、門真先生は書き直した指導案を読み、「う～ん、う

〜ん」と言っておられました。検討会が終わり、台原の自宅に帰ると、八時すぎに「ピンポン」とチャイムの音が。誰かと思うと、門真先生と土井先生でした。

「オレさぁ、やっぱり前の指導案の方がいいと思うんだけど……」とお話しに来てくれたのです。それで前の指導案に戻して授業したのを覚えています。門真先生はサークルが終わったあとも、ずっと気になっていたのでしょう。その授業に対する情熱に驚かされたのは今でも忘れません。



次に何度か見せていただいた門真先生の授業の中で、忘れられないのは燕沢小学校での最後の公開授業。みなさんが「卒業授業」と呼んでいた授業です。

その当時、門真先生のクラスには、今思えば、発達障害だったと思われますが、男の子が一人いました。何度か席から立とうとするのを、門真先生が授業の流れがいったん途絶えても、誠実に忍耐強く関わっていました。きっと日頃からそんな風に接していたのでしょう。指導案通り進まない「歯痒さ」もあったと思いますが、今思い返しても、あの男の子に対する関わり方は素晴らしかったと思います。何人もの参観者が来ている中で、なかなかできることではありません。先生があんな風に根気強く関わっていたら、他の子どもたちも真似をして、いろいろあっても諦めずに、あの子に優しく接していたことでしょう。授業を通して、子どもたちを人間としてどう育てたいのか、そこには門真先生の深い思想があったのだと思います。

私は現役時代に10年、そして退職後はボランティアとして10年、様々な発達障害の子どもたちや教師と出会ってきました。テクニック的に素晴らしい教師は何人かいましたが、もっと根本のところで一人の人間として、あんなふうに真摯に子どもと向き合っていたのは門真先生だけだと思います。

授業後の「あんまり、うまくいかなかったんだけど……」の自評に込められた門真先生の当時の思いはどうだったのでしょう？　今となっては計り知ることもできません。門真先生はあんまり他人の評価を気にする方ではなかったと思いますが、自分なりの最後の授業があまり思うようにいかなかたこと、でもその男の子のこともひっくるめて受容しておられたのでしょうか？　生きておられたら聞いてみたいところです。

話は少し飛びますが、門真先生が退職されてそれ程経たずに大学病院に入院されていた頃のことを今でも鮮明に思い出します。何度かお見舞いに伺って、そのたびにかえって私の方が励まされて帰ってきました。戦争から帰ってきて、子どもたちも貧しくて、物もなにもない時代に、門真先生のお母さんが作ってくれた布のグローブで子どもたちと野球をした話を聞かせてくれました。

またある時、神父をしている教え子が来て聖書の話をしてくれたと、教えてくれました。「オ

レは今まで、視覚、聴覚、味覚、触覚、嗅覚の五感で感じることができること、科学的なことしか信じられない。信じないぞ！　と思ってきたけど、この頃それだけではないのかも知れないと思ってきている」と話してくれました。

私はクリスチャンなので、その続きを聞きたかったのですが、まもなく危篤だという知らせを聞きました。亡くなった時は、私たちにとって本当に大きな存在を失ったと思いました。

葬儀の後に河北新報に門真先生の教え子の投書が載っていました。子どもたちに慕われていたんだなあと思います。訃報に接して教え子が投書する教師なんて、いったい何人いるんでしょうか？

私の中での門真先生のイメージは、生涯「求道者」のような姿です。亡くなられても「こんな時、門真先生はどう思いますか？」と問いかけたいことがたくさんありました。門真先生から受けた人間的影響は大きく、私の中の一部を作っているかもしれません。そういう意味では、私も門真先生の教え子の一人です。

共に学びし日々はるかなり夏ゆきぬ

（元教員）

忘れない

揚妻和子

国見小学校からの転勤先が東仙台小と聞いて、私は「ヤッター」と大喜び。国語サークルで、いつも深い読み取りの実践を話して下さっている門真先生のいらっしゃる学校へ通うことができるのですから。

その上に、先生のお嬢さんの担任にもなってしまいました。ああ、ちゃんと教えなきゃ恥ずかしいと緊張しました。でも「よろしくお願いします」と先生に頭を下げられてしまいました。

「おとうさ～ん」職員室の窓から、門真先生を見つけて大きな声で呼びかけるお嬢さん。一瞬、照れくさそうな笑顔の門真先生。微笑ましい親子の情景でした。

同じ学校にいるお陰で、先生があちこちの学校から国語研究会に招待されお出かけの時、「いっしょに行くすか？」と声をかけて下さり、私は二つ返事でご一緒させていただきました。

大分涼しい時期でした。その日は先生のバイクの後ろに乗せていただき、仙北の学校へ向かいました。校庭から出発するとき、窓から子どもたちが「ヤイノ、ヤイノ」と騒いで手を振ってくれました。取り入れの済んだ田舎道、冷たい風が吹く中を、私は必死に先生の背中にしがみついて行きました。

どこの学校だったか、どんな授業だったのかすっかり忘れてしまいましたが、あの時の寒さだけは忘れません。

でも門真先生の思い出は、あたたかいものいっぱいです。そのあたたかさは忘れません。

（元教員）